ベビードールの誘惑

Surprise Presents

Hyunckel & Maam

【番外編】ベビードールの誘惑

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=18579661

ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, レオナ, 原作終了後

パンツの日（8/2）に合わせて書いたもの。
しばらくポイピクで公開していました。

これ自体は、パンツの日合わせだったのですが、以前、かなぶんさんuser/131757にエアスケブをお願いした際に、こちらのベビードールをモチーフにしてくださって、エアスケブを描いていただきました！！
かなぶんさん、ありがとうございましたー！！
その際のリクエストが「現パロ」でしたので、こちらの作品も、どちらの世界観でも読めるようにしてあります（たいした変更はしていませんが・・・）。

挿絵ではありませんが、ベビードール繋がりなので、かなぶんさんの色気たっぷりなヒュンマイラストは、本文内に飾らせていただきました。
ありがとうございました！！

表紙写真はAcフォト様にお借りしました。

2022.7.16 ポイピク投稿
2022.10.22 ヒュンマフェスリラン合わせでpixiv移行

Table of Contents

【番外編】ベビードールの誘惑

　たっぷりのフリルに繊細なレース。
　大きくあしらわれたリボンは、きっと胸の中央で結ばれるようになっているのだろう。
　そのリボンからは、孔雀の羽のように優雅に、ゆったりと、薄手のシフォンが左右に広がり、長くテールのように、引いていた。
　細い肩紐にも小さなリボン。
　そのどれもが淡いピンクの色彩を放っていた。
　結婚祝いにと、いもうと弟子から贈られたその衣類を見たとき、マァムは目を輝かせた。
「わあ・・・かわいい。」
　だが、一緒に入っていたカードを見て、マァムはどきりとした。
　慌ててそのカードを隠そうとしたが、目ざとく、夫に見つかった。
　ヒュンケルは、マァムの手元をのぞき込んで、たちどころにその文字を読んだ。
　慌ててマァムは隠したが、もう遅かった。
　マァムは、恐る恐る彼に尋ねた。
「・・・見た？」
「見た。」
　短くヒュンケルは答えた。彼も複雑そうな顔をして、ため息を吐いた。
「・・・あの方は。
　いくつになっても変わらんな・・・。」
　マァムは、もう一度、その手元のカードに視線を落とした。
　そこには、見慣れたレオナの筆跡で、祝辞とともに問題の言葉が記されていた。
—寝室で、着てね。
　マァムは、改めて贈られた衣類を見た。
　一目見たときは、お姫様のように可愛らしい衣装だと思った。
　だが、レオナのカードを見て嫌な予感がし、マァムは、戸惑いな

がら、その衣類を手に取った。
「・・・えっ。」
　マァムは、その衣類の下に手を差し入れた。手触りは極上で、滑らかだ。上質の生地だということがその感触だけですぐに分かった。
　だが、問題は、そこではなかった。
　マァムが、その生地の下に手を入れたにもかかわらず、その手は、生地を通して、はっきりと見て取れた。
　マァムの手の輪郭だけではなく、その節々まで見える。
　隣で見ていたヒュンケルが、ぼそりと呟いた。
「・・・薄いな。」
　手でさえも、こんなにはっきりと透けて見えるのだから、つまり、これを着るということは、その下の肌も透けて見えるということで。
　そこまで思い至って、マァムは先ほどのレオナのカードの意味がはっきりと分かった。
　カードの文字が、レオナの声で、頭の中で再生された。
—寝室で、着てね。
　とたんに、マァムの顔が真っ赤になった。
「だ、ダメ—っ！！」
　顔を赤くして戸惑うマァムを横目に、ヒュンケルはおかしそうに笑いをこらえていた。レオナからの余計な贈り物ではあったが、マァムの可愛い顔が見られたから良しとするか、と言わんばかりだ。
　笑いをかみ殺したヒュンケルは、ふと、レオナからの贈答品の箱の中に、まだ手に取っていないものがあることに気付き、目を止めた。
「マァム。」
　動揺していたマァムは、それどころではなかった。
「な、なに。」
「下が２つ入ってないか？」
「え？」
　見ると、確かに、箱の中には下着が2枚入っていた。

マァムが先ほど手に取った、たっぷりとしたシフォンの上衣と揃いの生地で作られた下着が何故か2枚ある。
　マァムは、恐る恐る、それを手に取った。
　そして、一瞬の後。
　マァムは、先ほどよりももっと真っ赤な顔をして、両手でそれを握りこんだ。
　マァムは上ずった声で叫んだ。
「レ、レオナーっ！！」
　隣で見ていたヒュンケルは、ため息交じりにつぶやいた。
「・・・裂けていたな。」
　そう、あろうことか、その下着は通常の作りとは異なっていた。
　１つは、上衣と共布で作られた薄手の下着だった。サイドが紐で縛るようになっており、それだけでも十分な色気のあるものだった。
　だが、もう一つは、まったく構造が異なっていた。
　最も重要な、大事なところにあてがうはずの箇所、よりによって、そこに亀裂が入っていたのだ。
　それも、誤ってついたものではない。
　初めから、そういう仕様で作られていることがはっきりとわかるものだったのだ。
　マァムは、真っ赤になって、汗までかいて、ヒュンケルの目から隠すように、その下着を握りこんだ。
　すると、ヒュンケルが、マァムの肩に、ぽんと手を置いた。
「マァム。」
　息がかかりそうなくらいの近くで、わざと熱っぽい声で呼びかける。
「着てくれないのか？寝室で。」
　囁くように、そう問いかけてくる。
　マァムは必死になって叫んだ。
「ヒュンケルっ！！！！」
　親友の愛溢れる悪戯に、夫の急に醸し出される夜の雰囲気に、マァムは翻弄されっぱなしであった。

芳流さんへ
現パロな
ヒュニマ♥
2022.
ヒュニマスタフェス
松原かけおぱん

イラスト　松原かなぶん様（https://www.pixiv.net/users/131757）